

時間について
(20260808)

時刻から時刻の間→
空間のイメージが
入り込む

時間の感じ方は人
によって違う

子どもの頃は長
かった→大人にな
ると一瞬で過ぎ去る

6歳→1年は1/6
60歳→1年は1/60ぐ
らいの感覚

体験が少ない→時間
間隔が違う

地球の時間と自分
の感じる時間

外の過ぎて行く時
間→社会生活には必
要

外の時間に支配さ
れて生活している

自分で感じるこ
とが大事

時計→社会生活
を送っていくため
の便宜的なも

花の色は移りにけ
りないはずら
に・・・

心理的時間と客観
的時間

ミヒャエル・エン
デ「モモ」→「ム
ダ」な時間こそ大
切な時間

年をとるにつれて
早くなる→流れ方
が違う

物理量として定義
して議論する必要→
客観的時間（物理
学において）

ニュートン→物体の
運動を数学的に記
述するため様に
流れる絶対空間、
時間を想定（物質
や運動に関わりな
い）

アインシュタイン→
時間の進み方は運
動状態、重力場
によって変化する→
様ではない（ゆが
む）

光速を超える粒子
はない→光は質量
を持たない粒子

時間、空間は運動
によって相互に関
連し変化する

時代によって時間
の捉え方、流れ方
が違う

時（とき）と時間
（時計によって計
られる）

「とき」は大和こ
とば、時間は大陸
（中国）から来た
ことば

自然の中で生きて
いる「とき」に感
じること→自然の流
れと一体となった

死ぬときが来たら
死ぬ

きょうは死ぬのに
いい日だ

時間は進むのみで
戻ることはない

時間に気づく→つま
らないとき長く、
楽しいとき短い

動いているから時
間を感じる→動きが
ないと時間は感じ
ない

動いている→変化し
ている（変化は時
間で計られる）

「いま」が変化し
ている

子どもは楽しいか
ら自分の感覚だけ
に意識が向く

寝ているとき夢を
見ているとき、時
間がないように感
ずる

諸行無常→常に変化
する

眠れない時は時間
は長く感ずる

江戸時代以前、明
け六つ、暮れ六つ
であり、地方によ
り時間は異なって
いた（不定時法）

陰暦→月の満ち欠け
の暦

明治以降、グリゴ
リオ暦（太陽暦）
採用、全国一律の
時刻、時間（定時
法の採用）

鉄道をはじめとす
る産業の必要

産業→営業時間、労
働時間、交通の定
時性（正確さ、速
さ）

産業→効率的な機能
集団→時間厳守、集
団行動、大量生産→
勤勉の徳目

時間に人間が支配
されるようになった

タイムマシンのよ
うなことはある
か

状況によるし、感
じ方の違いにもよ
る

時間をどのように
気にするか

体内時計、生命の
バイオリズム

地球の自転、公転
による摂理に一体
となった生活

主観的に違うもの
をどう調整をとっ
ていくか

農事暦→雪形「種
蒔きじいさん」など

歳時記、二四節季
など生活を通じて
心に働きかける言
葉

支配者が時間を支
配する

「楽しい」→エネ
ルギーを使う

コスバ、タイパ→経
済効率

スマホの普及→世界
の均一化

時間を守る徳目→
「国民性」とも
なった

子ども→客観的時
間を見ない、主観を
生きている

待つことができな
くなっている

スマホ→「時間どろ
ぼう」

どこにいても「灰
色の男たち」が追
いかけてくる

かつては待つこと
が生活だった

死に近づいたとき
死を意識する

死の間際の人たち
の多くの言葉→ほん
とにやりたいこと
をやればよかった...と

人間は、時間の働
きのうちに「自分
の存在」を見る、
知る→「ある」（存
在了解）

自分の死→その先の
可能性はない→自分
の過去を見直し**現
在**を生きる→本来的
時間性

純粋な持続（時
間）→直接の意識で
質的狀態（心）→
「こと」

時間の流れに後先
をつけなければ時
間の感覚が生じな
い→「もの」に託す

自分の死から眼を
そらし漠然とした
期待と向き合う。
過去は過ぎ去った
ものとして忘却→非
本来的時愛間性

非本来的と本来的
は相互に關係して
いるが、本来的が
時間の根源的なも
の

仏教で鉦を叩く→そ
の瞬間を意識させ
るために叩く→輪廻
の時間

「こと」(心)は
「もの」との共生
関係で現実の世界
に存在する

「さまざまのこと
思ひだす桜かな」
(芭蕉)
現実の時間(落
花)と思い出の時
間の流れが同時に
映し出される

宇宙がビッグバン
で生まれてから138
億年たつとはどう
いうことか

ビッグバンを仮定
しないと現在まで
に実証されている
さまざまのことが
説明できない→仮説

タイムマシンはあ
るか

一般相対性理論の
四次元空間
(x, y, z, t)から世界
を記述したら負の
時間 t が可能という
ことからきている

自分のところを大
切にすること

- t ということがある
か→熱力学の第二法
則(エントロピー
増大の原理)から t
のマイナスはない→
『back to the
future』は起こらな
い

